

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(c)

研究期間：2008～2010

課題番号：20530625

研究課題名（和文）コンパニオン・アニマルとの生活が高齢者の精神的健康に及ぼす影響

研究課題名（英文）Effects of companion animals on mental health among the elderly

研究代表者

安藤 孝敏 (ANDO TAKATOSHI)

横浜国立大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：00202789

研究成果の概要（和文）：

本研究では、高齢期にある人たちと家族の一員であると認識されるようになってきたコンパニオン・アニマル（伴侶動物）との“日常生活における関わり”に着目し、この関係から得られる良否両側面の影響について検討した。その結果、年齢の高い者ほど犬との情緒的一体感は弱くなる傾向にあり、1年後には、全体として、飼い主と犬との情緒的一体感がやや弱くなることが分かった。1年以内に飼い犬を亡くした経験のある高齢者へのインタビュー調査から、高齢者に特徴的と思われる3カテゴリー（「死別したペットとの関係」「今後に飼育について」「飼育しない理由」）が抽出でき、高齢期におけるペットロスの様相を理解することが可能になった。

研究成果の概要（英文）：

Positive and negative aspects of everyday relationships between elderly people and companion animals, which are increasingly considered to be family members, were investigated in relation to dogs. The results indicated that as a person becomes older, the emotional bond between the owner and the dog becomes weaker. In general, after one year, the bond between the owner and the dog became relatively weak. Furthermore, an interview survey was conducted with elderly people who had lost their dogs within the last year. Results indicated three categories specific to elderly people: (1) relationship with the lost pet, (2) keeping pets in the future, (3) reason for not keeping pets. Above findings are considered to be useful for understand the circumstances related to pet lose in old age.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	200,000	60,000	260,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会老年学、高齢者心理学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：コンパニオン・アニマル、ペットロス、精神的健康、高齢者

## 1. 研究開始当初の背景

近年、犬や猫などのペット飼育頭数の急増に見られる「ペットブーム」の中で、人と動物の関係（Human-Animal Bond）に注目が集まっている。ペットフード協会（2008）によれば、犬を飼育している全世帯において、50～69歳の中老年層の占める割合が最も高く、中老年の飼い主と犬との関係を詳細に検討することは、この年代の人たちの生活の質を考える上で重要なテーマである。

## 2. 研究の目的

本研究は、高齢期にある人たちと家族の一員であると認識されるようになってきたコンパニオン・アニマル（伴侶動物）との“日常生活における関わり”に着目し、この関係から得られる心理的効果や影響を実証データにもとづいて詳細に検討することが目的である。特に、これまでの数少ない研究が示している良い影響や効果だけでなく、ペットをなくすということやペットの問題行動を引き起す飼い主のしつけ方や飼い方などを含めて、好ましくない影響についても取り上げる。最終的には、高齢者がコンパニオン・アニマルと生活することの意義や影響、コンパニオン・アニマルと生活を続けるための具体的な支援策などについて提案することを目指している。

## 3. 研究の方法

(1) 都市部でコンパニオン・アニマルとして「犬」を飼っている 65～74 歳の男女約 257 人を対象に郵送法による質問紙調査（初回調査）を実施し、その 1 年後に追跡調査を実施した。調査地域は室内飼いが多い首都圏であった。主な調査内容は、ペット動物の飼育に

関する項目（飼っているペットの種類と数、飼い始めた契機、飼育場所、主な飼育者、飼育年数、これまでのペット飼育歴、ペット飼育に関する知識と飼い方）、6 項目からなる「ペットとの情緒的一体感尺度」、社会関係（続柄別の情緒的一体感を感じる人の数と手段的支援の提供者数）、基本属性（性、年齢、学歴、配偶者の有無、子供の有無、同居家族、住居の種類、収入など）、心身の健康度の指標である抑うつ尺度、孤独感尺度、生活満足度尺度、老研式活動能力指標などであった。初回調査の有効回答者数は 223 人（男性 107 人、女性 116 人）、追跡調査の有効回答者数は 167 人（男性 76 人、女性 91 人）であった。

(2) 高齢者がペットとの別れをどのように体験しているのかを把握するために、1 年以内に飼い犬をなくした経験のある 4 人（男性 1 人、女性 3 人）の高齢者を対象に半構造化インタビューを実施した。事前に質問ガイドを作成し、それにそって 1 時間程度、協力者の了承をいただいて録音しながらインタビュアーとサブインタビュアー 2 名が個別にインタビューを行った。主な質問内容は「飼い始めたきっかけ」「生前のエピソード」「亡くなる時のこと」「亡くなってから今までの心境」であった。

## 4. 研究成果

(1) 初回調査の結果は次の通りであった。犬の飼育数は約 8 割が 1 匹であった。飼育場所は 8 割強が家の中であったが、年齢別に見ると、高年齢者で家の外が増加していた。飼育されている犬の年齢は 7～8 歳が最も多く、それ以下の年齢の犬が過半数を占めるが、13 歳以上の高齢犬も 1 割強と少なくなかった。

犬との情緒的一体感は強い（尺度の平均得点は高い）が、年齢が高くなると情緒的一体感は減少する傾向にあった。ペットをなくした経験があるのは約1割で、性別・年齢による違いはなかった。

(2) 初回調査時点では全員が犬を飼育していたが、追跡調査時点では「飼っていない」という回答が5.4%あった。過去1年間にペットをなくした経験があるのは約1割であることから、ペットをなくした者の半分程度が複数飼育か再び犬を飼ったことを示している。犬以外のペットの種類や犬の飼育数は前回とほぼ同様の状況であり、過去1年間にペット飼育状況に大きな変化が見られなかった。犬の飼育場所は約85%が家の中であったが、年齢による飼育場所の変化は初回調査時よりも顕著であった。飼育されている犬の年齢は9～10歳が最も多く、13歳以上の高齢犬も約15%と少なくなかった。他の調査で指摘されている近年の高齢犬の増加と一致する結果といえる。犬との情緒的一体感は強い（尺度の平均得点は高い）が、初回調査の回答と比べると、肯定的な回答の割合が少なくなっていた。

(3) インタビュー調査では、録音データを書き起した逐語録を読み込んで、分析ワークシートを作成し、カテゴリー抽出を試みた。その結果、メジャーカテゴリーは「飼い始めたきっかけ」「名付けについて」「生前のエピソード」「死因」「死別のエピソード」「死別したペットとの関係」「喪失に際しての他者との関わり」「今後に飼育について」「飼育しない理由」（今後飼育しないと答えた人の理由）の9カテゴリーを抽出した。この中から、ペットロスにおいて高齢者に特徴的と思われる3カテゴリー（「死別したペットとの関係」「今後に飼育について」「飼育しない理由」）について詳細に検討したところ、次のような内

容であった。

①『先行き不明』：先の状況や心境がどうなるか分からない

②『世話の負担』：これまでと違い、犬の世話による負担が大きくなるのではないかと懸念

③『先立つ不安』：自分が犬より先に逝ってしまうのではないかと不安

④『他者との関わり』：ペットの死に際し関わりがあった相手と関わり（今回は全員が肯定的な受け止め方をしていた）

「亡くなったペットとの関係」においてペットとの濃密な情緒的交流を思わせるカテゴリーが抽出されたと同時に、「今後の飼育について」は「飼わない」と「不明」というカテゴリーが出現したことは特筆すべきであろう。既にペットは家族として認知されていることはこれまでも指摘されている通りだが、ペットはどの人にとってもたいてい「必ず先立つ家族」である。高齢者の場合はそれに加え、ペットよりも自分が先立ってしまうかもしれない恐れをも抱かねばならない。その恐れが、ペットの喪失と共に意識化されてくるのだろう。また、どの調査協力者もペットの喪失に際し、家族や近隣の人々、獣医師などとの関わりを肯定的に受け止めていた。このことは、ペットロスへの対処として、周囲の社会的なつながりが重要であることを示唆するものであろう。

この肯定的な受け止めと、インタビュー調査の協力者がペットとの別れを他者に語れる状況にあった方々であったことを考え合わせると、さらに研究を深めて詳細に検討する余地があろう。また、今回は探索的にカテゴリー抽出を行ったにすぎないため、今後はさらに今回取り上げた以外のカテゴリーも含めた全てのカテゴリーをさらに洗練し、データを厚くした上で、高齢期のペットロス

の様相についてモデル化することが必要である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

- ①朝比奈千絵・安藤孝敏 2010 高齢期におけるペットロス 日本心理学会第74回大会発表論文集, 1135.

[図書] (計1件)

- ①安藤孝敏 2011 アニマルセラピーとは 久保真人(編)『感情マネジメントと癒しの心理学』朝倉書店 pp.135-136.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

安藤 孝敏 (ANDO TAKATOSHI)  
横浜国立大学・教育人間科学部・教授  
研究者番号：00202789

### (2) 研究協力者

朝比奈 千絵 (ASAHINA CHIE)  
横浜国立大学・環境情報学府・博士課程後期